



父の祖父、父の父

川田 篤
弁護士・弁理士



両親は、伊予市でも「郡中」の出身です。祖父祖母もやはり郡中の出身です。先祖は、さかのぼれば江戸時代から大洲藩の北のはずれの郡中という海辺の港町で「唐川屋」の屋号で商いをしていたそうです。今も少し山の方に「唐川」という地名があり、と石が採れるそうですが、この地名との関係は不明です。先祖の墓所は、郡中港駅の傍らの栄養寺。墓銘を見てみると、二百年へい前らしい古い

ものもあります。

父の祖父、私からみれば曾祖父は、田舎町としては、手広く商売をしていたようです。名前を「勇五郎」、あだ名は「うまいことゆうごろう」と伯父から聞きました。何をしてたのかですが、造り酒屋とか、種物屋（栽培用種子の販売）とか諸説あります。曾祖母は郡中では名家の宮内家から嫁いできているようですので、それなりに繁盛していたのでしょう。

父の父、私からみれば祖父は、明治13年の生まれ。薩摩の西郷さんが鹿児島で自刃してから3年後です。今、もし生きていたとすれば百三十余歳。実際は、昭和9年に54歳で亡くなりました。私の父は、祖父が49歳の時の子供ですの

で、祖父が永眠した時、父はまだ4歳。ほとんど祖父の記憶はないよつでした。唐川屋は、実は父が生まれるより5年ほど前の大正時代の終わりころに倒産してしま

す。倒産後、祖父ら一家は八幡浜市の川之石で旅館をしていた親戚を頼り、しばらく移り住みました。父も郡中ではなく川之石で、祖父祖母の14番目の末っ子として生まれました。祖母は十代から四十年代まで、何と14人もの子を祖父との間に生んでいます。今の少子高齢化社会では、なかなか想像しがたいことです。

父は、郡中の尋常小学校を卒業後、旧制の高等小学校に進学しました。高等小学校の卒業生は就職するのが普通で、父もそのつもり

ふるさと伝言

でした。ところが、戦時中、松山工業学校に進学し直すことになり、1年遅れて入学しました。当時の工業学校生がさらに進学するとすれば、大学ではなく、工業専門学校だったようです。しかし、戦後、父が4年生の時、工業学校の生徒にも旧制高校受験の道が開かれ、父は旧制松山高校を受験しました。そのころ、伯母の一人は、

しかし、晴れて松高生になったのもつかの間。米国流の六三三四制が導入され、旧制高校は廃止。父は松高入学の1年後、新制京都大学を受験。当時、既に松中・松高・京大という学歴偏重の風がありました。父の京大受験も、たまた、その風に乗ったような感じでした。

道後温泉の旅館で働いていました。旅館主の息子さんが旧制松山中学の生徒で、やはり松高を受験する予定でした。旅館の誰かから「工業学校生が松高に受かるわけがない」と苦言されたので、悔しく思っていたところ、結果は旅館主の息子さんは不合格。父は合格、大いに留飲を下げたと聞きました。

今も偏差値の高さで、人も大学も評価しがちかもしれませんが、人々の強い横並び意識の裏返しなのでしょう。その人々を一心納得させる序列として、学歴や年功などが良くも悪くも社会で機能してきたよつに感じます。半世紀を越えて生き延びてきた学歴偏重の風は、人々に横並び意識がある限り、今後もなくならない気がします。（かわだ・あつし、本籍伊予市）